

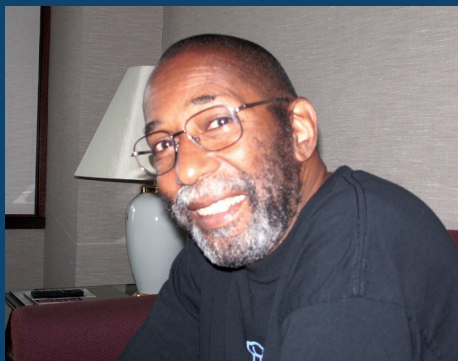
# Jazz Interview Vol.2

## “ミスター・ベース”

## Ron Carter

まず、ロンさんの背中に惚れた。風格などとは全く異なるあの哀愁漂う佇まいは、ことばでは上手く表現できない。次に、会話の中で時折魅せる笑顔に惚れた。真の優しさが滲み出るその微笑みは、ベースを弾いている最中にはあまりお目にかかれない表情だ。そして、最後はやっぱりベースにノック・アウトされた。

(2005年7月3日キャトル東恵にて 取材・文:加藤正之 取材協力:高梨道生)



——アルバム『ゴールデン・ストライカー』リリースから2年ほど経ちますが、新作リリースの予定はありますか。

今、カルテットでのレコーディングに関して交渉段階で、多分今年の11月か12月にレコーディングになると思う。アルバムの内容はまだ具体的に決まっていないんだ。

——今後の予定は？

大阪ブルーノート公演(7月4日、5日)後は、一旦ニューヨークに戻ってボストンのバー「ケンブリッジ」で、“ゴールデン・ストライカー”トリオで公演(7月8日、9日)。その後、1週間休みを取って、カルテットでのコンサート。8月4、5、6日にデンバーのユースティバルにカルテットで出演して、2週間休みを取る。次に、パリで3日間行われる「ベース・コンファレンス」に出席して、9月4日から5日間カリフォルニアで行われるセロニアス・モンク関連のイベントがある。その後、10日間ブラジル(サンパウロとリオデジャネイロ)でカルテットでの演奏があって、また2週間の休みを取るといった予定だよ。

——あなたにとって日本の印象は？

いつもコンサートが行われる会場とホテルとの往復ばかりで、ゆっくりと観光や散歩を楽しむ時間が無いのが残念だね。本当は景色が美しい田舎の方も見てみたいんだけどね。

——1964年にマイルスのグループでの初来日した時の日本の観客の反応をどう感じましたか？

みんな音楽が好きなんだということがわかったね。当時の日本のお客さんはじっと静かに座って聴いているだけで、不気味に感じたなんて話もあるみたいだけど、私は全く気にならなかった。どんな聴き方をしてもいいわけだからね。

——日本の音楽に触発されることはありますか？

以前にLP盤で日本の民謡(フォーク・ソング)をレコーディングしたことがある。ベース・プレイ自体に影響されることはないけど、音楽を楽しむということを学ぶことはできるね。

——現在もニューヨーク大学やマンハッタン音楽院で音楽を教えているんですか？

学校での仕事は2年前にリタイアしたんだ。今は4人の生徒をプライベートで教えている。当時は卒業課程のジャズ・アンサンブル、編曲、作曲に、6人の生徒にベースを教えていた。

——ベースを弾く上で一番大切なことは何ですか？

まず、練習。そして、技術に関して良い助言を与えてくれる先生が必要だね。ベースという楽器は、一人で学ぶことが難しい楽器で、他の楽器と一緒に演奏するためにあるような楽器だから、スポット・ライトが当たるようなソロばかりに気を取られて、他の部分を疎かにするのは良いことではないね。

——ベースを弾く上で、クラシックのテクニックを学ぶことは重要だと思いますか？

同じ音階、同じチューニング、同じ弦、同じサウンド・ホール、同じブリッジを持った楽器なんだから、ジャズのテクニック、クラシックのテクニックと区別する必要はないと思うよ。クラシックの演奏家だってジャズから学べることも多いだろうしね。

——10歳でチェロを習い始めてから、ベースを選択した経緯を教えてください。

ベースは18歳の時に弾き始めた。元々はクラシックの演奏家になりたかったんだけど、アフリカン・アメリカンのミュージシャンにとって、クラシック音楽の世界で成功することはとても難しかったんだ。だから、ジャズに興味を持ち始めたんだ。

——アルバム『スターダスト』では、オスカー・ベティフォードをトリビュートしていましたが、あなたが最初に惚れたベーシストは誰ですか？

ベーシストみんなだよ。あらゆるベーシストから影響を受けているんだ。勿論、オスカー・ベティフォードも素晴らしい作曲家であり、凄いベーシストだよ。

——現在の若い世代のベーシストをどう思いますか？

20～25歳くらいの年代でいうと、あまりいい傾向は見られないね。多くの若いベーシストは、正確なノート、正確なサウンドを出せていないし、スタンダードなど曲もよく知らないよね。他のベーシストのプレイを見に出かけたりもしないようだし、自分の可能性を広げようと努力していないように感じるね。

——あなたはポール・チェンバースと同郷で知り合いだったようですが、互いにベースについて語り合ったりしましたか？

そのようなことは全くなかった。お互いに子供の頃からの知り合いで、普通の子供たちと同じような話しかしなかったね。音楽についてじっくり話すようなこともなかったよ。

——ポール・チェンバースが亡くなった時は、お葬式の際に7人のベーシストが「ディア・オールド・ストックホルム」を演奏したそうですね。

いや、それは覚えてない。葬儀には参列したけど、その部分は記憶に残っていないんだ。

——あなたはポール・チェンバースの後釜として、マイルスのグループに入りましたが、その際にポールから何かアドバイスがあったのですか？

それも、全くなし！(笑)。「さあ、もうすべて君のものだよ！」って感じだったんだ(笑)。

——マイルス自身から声を掛けられたのですか？

そうだね。「来週、カリフォルニアにツアーに行くから一緒に来

ないか？」って言われたんだけど、ちょうどアート・ファーマーのグループでプレイしていた真っ最中だったから、「わからぬい」って答えるしかなかった。もしアートが「イエス（カリフォルニアに行ってもいいよ）」って言えば行けし、「ノー（ダメだ）」って言われたら行かないつもりだったんだ。でも、結局アートがOKして、マイルスのバンドに加わることになったんだよ。

——1968年にマイルスのバンドが解散したひとつの要因に、あなたがエレクトリック・ベースを弾くの嫌だったからなど聞いたことがありますが…。

いや、その話はちょっと違うんだ。私はそれまでツアーやレコーディング、コマーシャルの仕事、その他の活動で5年間も旅周りを続けて本当に忙しかった。子供も2人いて、どんどん成長していく過程で、どうしても家族との時間を大切にしたいかったんだ。だから、マイルスの元を離れることに決めたんだよ。その頃は、自分のグループで演奏したいなんていう気持ちも全くなくて、ただ家族と過ごす時間が欲しかっただけなんだ。

——マイルスから学んだことでは一番大切なことは何ですか。

“Every night's important!” 全てのギグが大切だった！

——マイルスのバンド時代のお気に入りの作品は何ですか？

ちゃんと聴いたことないんだ（笑）。

——愛用の楽器について教えてください。

1910年に作られたジュゼッチ“Juzek”製で、1959年から使用しているベースが一番のお気に入りだよ。この楽器をずっと使い続けている。勿論、今回のツアーにも持って来ているよ。その他に、ピッコロ・ベースにハーフ・サイズ・ベース、それとレギュラー・サイズのベースを2本持っている。

《冗談だろうけど、ロンさんに「将来、君がこの私のベースを使うかい？」なんて問われ、思わず「ええ、是非」なんて口走ってしまった…。「ロンさん、本気になっていいんでしょうか？」》

——弦は今も「ラベラのブラック・ナイロン」ですか？

そうだね。こ25年くらい使っている。状態や気候などの影響にもよるけど、一度張ったら1年間くらいは交換しない。

——最初にアンプを通してウッドベースを弾いたのは、あなただったと聞いたことがありますが…。

んー、それはどうかな？ 最初かどうかは良くわからないな。当時のレコーディングの状況から使ったんだと思うけど、それを誰かが私が最初だって書いたんだらうね。

——次の4人のベースマンについて聞かせて頂けますか？

《チャールズ・ミンガス》

素晴らしい作曲家だね。ベース・プレイヤーとしてはみんなそれだけ評価が分かれるみたいだけだね。

《ダグ・ワトキンス（ポール・チェンバースの従兄弟でもある）》

信じられないような素晴らしいサウンドを持ったベーシストだったね。あんなに若くして亡くなってしまった（享年27歳。交通事故で即死だった）のは本当に残念だ。彼がベーシストとして更に成長していく過程をもっと長い間見ていたかった。特に、ソニー・ロザインのアルバムで、トミー・フラナガン(p)やマックス・ローチ(ds)と一緒にレコーディングした『サキソフォン・コロッセオ』でのプレイは最高だったね。

《サム・ジョーンズ》

グレート・フィリング、グレート・ビートを持ったベーシストだね。テクニク的には凄いものを持っていたわけでないけれど、バンドをスイングさせることにおいては抜群のものを持っていたよ。

《ゲーリー・カー（クラシック界の重鎮）》

彼のことは良く知っているよ。私のサウンドと違って彼のサウンドは明るい感じだよ。彼のプレイは大好きだよ。

——この4月にパーシー・ヒースさん（MJQのベーシスト）

が亡くなってしまいましたね。

1961年にカリフォルニアで初めて彼に会ったんだけど、直ぐに意気投合して仲良くなったんだ。それ以来ニューヨークに来る度に、いつも「調子はどうだい？」って言い合う仲だったんだ。彼が亡くなって本当に寂しいよ。

——音楽以外の趣味は何ですか？

草花が好きなんだ。家庭用の花が特に好きだね。あとはスポーツ・カー！ 私が今所有している車のは、サーブのエアロ・ステーションワゴンなんだ。マセラティやフェラーリなんか最高だね。勿論、そういう車に乗る時は、ベースは乗せないよ！ 私とスポーツカーだけ（笑）。

《噂によると、結構な飛ばし屋らしいロンさん。くれぐれも安全運転をお願いします。》

——最後に、「The Walker」読者にメッセージを頂けますか。

特に、バンド・リーダーになりたいと思っているベーシストについて思うことが二つあるんだ。一つは、ベーシストとして必要・リーダーを務めるということは、全ての曲でソロを弾く必要があるということではないんだ。バンド・メンバーの選択、曲のアレンジ、的確な曲やキーの選択、曲順などを決める際に、如何に自分たちも楽しみながらプロフェッショナルとしての演奏を提供できるかが重要なんだ。バンド・リーダーとしてソロばかりに気を取られるようなことは、ある意味でわがまま振る舞いともいえるし、私はそのようなことを一度も考えたことはない。もう一つ、ベース・プレイヤーとして欠かせないことは、音楽やプレイを楽しむことを学ぶということだね。如何にして他のプレイヤーたちと上手くやれるかということ、自分のソロのことばかり気にしているような利己主義にならないことだね。時にそのような音楽は退屈に思えるんだ。ベーシストが良いリーダーになるには、如何に自分のソロを長く演奏するかなんてことじゃなくて、如何にバンド全体のサウンドを良くするかが重要なことなんだ。それがベーシスト本来の役割だからね。

——いつまでも素晴らしい音楽を聴かせ続けて下さい。

"Thank you."

想像して欲しい…雪が舞うマンハッタン街の街角…そこにコート姿にマフラーを巻き、ウッドベースを担いで歩くロンさんの姿…この風景はもはや芸術だ。

インタビュー後、温かくて柔かくて全てを包み込むような大きな手で握手をしてもらった。「この手であのベースを弾いているんだな〜」なんて感動に浸っている間に夢のような時間が過ぎた。その夜、ロンさんからお招き頂いたブルーノート東京公演最終日のフィナル・ステージを拝見。その感動はもったいなくて、人には話したくない！ ロンさん、本当にありがとう！！

ドラムレス・トリオで名曲の数々を奏でた最新作！



The Golden Striker  
Ron Carter

Ron Carter(b),  
Russell Malone(g),  
Mulgrew Miller(p)

1. The Golden Striker 2. On And On 3. N.Y.Slick 4. Concierto De Aranjuez(Adagio Theme) 5. Cedar Tree 6. A Quick Sketch 7. Parade 8. A Theme In 3/4 9. Autumn Leaves

東芝 EMI: TOCJ-68056  
¥2,800(tax in) Now On Sale!